［ブロック血液センター所長推薦優秀演題］

地方小都市における若年層対策としての「献血トークショー」の開催について

京都府赤十字血液センター[1)]，舞鶴ライオンズクラブ[2)]
小谷康文[1)]，岩佐則之[1)]，谷口重喜[1)]，山口健彦[1)]，辻　肇[1)]，富永　明[2)]，大瀧隆信[2)]

京都府赤十字血液センター福知山出張所は，京都府北部の福知山市に立地し献血と血液供給業務を担っている。

管内エリアは京都府面積の約70％。その管内人口は約45万人で京都府人口の約17％であり，高齢化率は約26％と典型的な過疎高齢化地域である。

そのような中でも，地域住民の献血意識は極めて高く，移動採血１稼動あたりの平均献血数は65名。単位数に換算して129単位と顕著な成績を上げている【図１】。

管内の高齢化が進む中，若年層献血者の確保は喫緊の課題であり，当出張所では４年前から「高等学校における献血セミナー」の開催を行政と共に推し進めることで実績を積み重ね，その結果，予め年間行事に組み込まれる高等学校も散見されるようになった。

おりしも，血液事業本部では2009年からLOVE in Actionの一環として武道館に16,000人集めたライブイベントが企画され，若年層から「献血」に熱い視線が注がれていた。

これを受け，当出張所では高等学校だけにとどまらず，「点」から「面」へ，地域全体に広がる若年層対策の必要性を痛感し，その地域で働き，その地域で学び，その地域で生活する若者を対象とした，「LOVE in Actionに類する地域イベントが企画できないか」との熱い想いが高まったのである。

そのような想いの中，献血運動に積極的な舞鶴市献血推進委員会を通じ，舞鶴ライオンズクラブから「結成50周年記念事業として献血に協力したい。」との申し出を受け，躊躇なく血液センターとして「献血トークショー」の実現を目指すこととした。

「献血トークショー」の開催地とした舞鶴市は，人口約8.6万人，内10代人口比は約10％である。

旧海軍ゆかりの舞鶴港を抱く赤レンガ倉庫群や，戦後の引き揚げ港として有名であり，現在は海上自衛隊イージス艦や護衛艦の母港として，また造船会社が隆盛している【図２】。

イベント実現に向け，関係者である府保健所，舞鶴市，ライオンズクラブと血液センターで2012年秋から10数回の協議を重ね，タイトルは「NEXT STAGE希望に満ちた未来に向けて今やれること」（中高生献血トークショー withよしもと）とし，開催日は市教育委員会から，市内各学校の授業参観を５月11日（土）に実施するという情報を得，「登校日の午後なら生徒たちが参加しやすいのでは。」という理由から，５月11日（土）に決定した。さらに厚生労働省からイベントの後

図１

援名義使用許可をいただくこともできた。

イベントの内容については，堅苦しさを除き，楽しさを前面に考え【図３】の構成とした。

イベントの対象者は，舞鶴市内にある中学校７校，高等学校３校で学ぶ生徒に，舞鶴高専，海上保安学校，海上自衛隊教育隊で学ぶ学生を加え，総数およそ5,700人をターゲットとし，一般市民の方も含め1,000人の参加を目標に広報活動を展開した。

まず，舞鶴ライオンズクラブと血液センターで対象となる学校や団体, 教育委員会などを訪問し，各校生徒数分のチラシや校内掲示用ポスターを持参のうえ生徒，学生の参加を要請，イベント開催日約４週間前からは市内各所にある府と市の掲示板，さらに大型ショッピングセンターや地元商店街組合のご協力をいただき，約200枚のポスターを掲出，３週間前から民間FMラジオで広告放送，１週間前に地元ローカル紙への広告掲載と市内全域に新聞折り込み４万枚を行いイベントの周知を図った。

開催当日は朝から雨模様で大変不安な気持ちで迎えたが，開場時間近くから子供たちや制服姿の学生などが次々と来場し，場内や客席では，けんけつちゃんが写真撮影に応じるなど，来場者とのコミュニケーションも積極的に行った。

会場はしだいに熱気に包まれ，地元女子高生のチアリーディングに始まり，よしもと芸人の軽妙なトークと広報スタッフとけんけつちゃんを交えての献血クイズで一気に会場が盛り上がり，またたく間に閉会となった。

後日イベントに参加した生徒たちから手紙が届き，「僕の血でたくさん人の命が助かるなら，僕はまたやってみたいと思います。」「献血の大切さや，今の献血の状況などを知ることができました。」「自分の血で誰かの命をつなぐことができるなんて素晴らしいことだと思います。」など，イベントを通じ，「献血」への関心，理解が深まり，こちらの趣旨が十分に伝わったことをうかがわせる内容であった。献血会場においてはイベントに参加した生徒，学生たちだけでなく，親子連れの方からも好評いただいた。

今回，人口８万６千人の地方小都市において，小さな出張所が取り組んだ企画であったが，約1,000名の参加を得，所期の目的を達成した。

次代に繋ぐため，とくに行政，推進団体と緊密に積極連携を図り過疎小都市においても継続した若年層への啓発展開が求められる。

図２

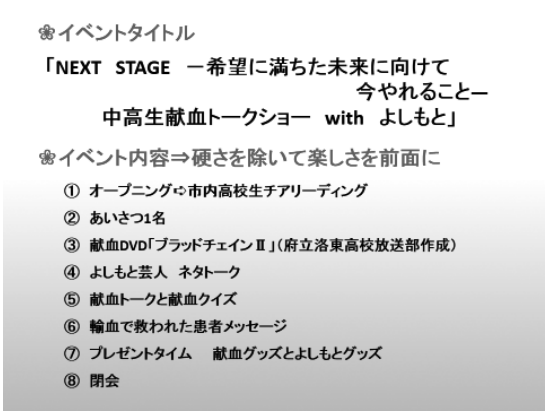

図３